

葉石濤作品に見られる日本文学の影響

—太宰治を中心に—

戸田 一康

はじめに

第1節 「等待」と「満願」—その共通点—

第2節 「等待」と「満願」—その相異点—

第3節 「等待」に込められた光への希求

まとめ

(要約)

文学評論家としての面ばかりが強調されがちな葉石濤だが、実際にはかなりの量の小説作品を残しており、しかもその作品世界は多彩であって、一口にその作風や傾向を論じることは容易ではない。筆者はかねてより、日本文学との関連性という視点から作品を見ていくことが、葉石濤文学理解のための一つの有効なアプローチたり得るのではないかと考えてきたが、本稿ではその試みの一つとして、葉石濤の短編小説「等待」と太宰治の「満願」をとりあげ、その共通点と相違点を分析すると共に、葉石濤自身のどのような思いが作品に込められているのかについて論じた。

はじめに

葉石濤は最も息の長い文学活動を展開している台湾作家の一人だと言うことができる。日本植民地時代の1943年に処女作を発表してから、戦後の国民党政府時代、それから現在の民進党政府時代までという60年以上に及ぶ時間的な長さもさることながら、その間には二二八事件や白色テロの恐怖、また政治犯の容疑で逮捕・投獄されるという辛酸を嘗め、また日本語から中国語への言語転換という困難をも乗り越えなければならなかった事実を考え合わせれば、その作家魂には鬼気迫るものすら感じられる。

葉石濤というと、すぐ『台湾文学史綱』¹が連想される。『台湾文学史綱』は戦前・戦後の台湾文学を関連づけ、一つの縦の流れとして台湾文学を捉えることに成功した初めての文学史と評されるもので、一般に葉石濤の代表作とみなされている。楊照などは、

我們一想起文學史就想起葉石濤。(我々は文学史と言え、すぐに葉石濤を思い出す。)²

と言うほどその影響力は強く、既に台湾文学史の古典となっているような感すらある。

しかし、この作品があまりに有名なために、葉石濤の文学評論家としての面ばかりが強調され、彼のもう一つの顔である小説家としての部分には、かえってあまり光があてられていないような印象を受ける。

実際には、葉石濤は小説家として少なからぬ作品を書いており、しかも初期に日本語で発表された「林からの手紙」³「春怨」⁴のような浪漫的なもの、戦後発表された自伝的な『紅鞋子』⁵『台

灣男子簡阿淘』⁶、台湾先住民族の女性を主人公とした連作『西拉雅末裔潘銀花』⁷、オランダ植民地時代の台湾に材を取った短編「玫瑰項圈」⁸など、その作品世界は多彩であり、一口に葉石濤文学と言っても、その傾向なり、作風なりを論じるのは決して容易なことではない。

筆者はかねてより、日本文学との関連性という視点から作品を見ていくことが、葉石濤文学理解のための一つの有効なアプローチたり得るのではないかと考えてきた。

なぜなら、日本植民地時代の安定期に日本語教育を受けた世代⁹に属する葉石濤は、日本文学を通じて文学に対する眼を開かれたからである。その過程は彼自身の文学修行時代を回顧する記述からも明らかである。

從明治時代作家一直進入大正作家作品世界；從夏目漱石、芥川龍之介、白樺派、新感覺派到一些勞農派左翼作家，無一不讀。大約在中學二年級以前，我大概把日本文學史上最主要的作家都讀遍了。（明治時代の作家から大正時代作家の作品世界へ。夏目漱石、芥川龍之介、白樺派、新感覺派からプロレタリア派の左翼作家まで読まざるは無し、であった。およそ中学二年までに、私は日本文学史上の主な作家をほとんど全て読破していた。）¹⁰

つまり、葉石濤の文学体験は日本文学によって始まったのであり、しかもそれは「読まざるは無し」というほど広く深いものであった。そうである以上、後の彼の作品に日本文学の陰影がないとする方が、寧ろ不自然であるに違いない。ただ、葉石濤が受けた日本文学の影響が、具体的にどのような性質のものであるかについては、まだ十分に研究されているとは言えないようである。

本稿では葉石濤の短編小説「等待」を取りあげる。この作品は、戦前日本語作家としてスタートしたものの戦後一旦筆を折り、長い空白期間を経て1965年に「文壇復帰」を果たした葉石濤が、1967年に中国語によって発表したものであるが、従来ほとんど論じられることがなく、先行論文は皆無に近い。この作品は最近になって、『賺食世家』¹¹という作品集に収められたが、そこで彭瑞金が書いた「解説」が、この作品について触れた殆ど唯一のものと言っていい。しかし、その「解説」にしても、一読テキストから得られる感想を述べたに過ぎないといった印象を受ける。

〈等待〉的主題應是「落魄文人」——「我」的自嘲（中略）醫生說，醫身不如醫心，這對於胸懷創造偉大小說卻一事無成的落魄文人，不是最大的嘲諷嗎？（「等待」の主題は「落魄した文人」——「私」の自嘲であろう。（中略）医者は身体を治すのは心を治すに如かずと言う。これは胸に偉大なる小説を蔵しながら、かえって一つとして成すところのない落魄文人に対する最大の皮肉ではないだろうか。）¹²

しかし、本当に「等待」はそれだけの作品なのだろうか。筆者の見るところ、「等待」はある日本文学作品の強い影響を受けて書かれたものであり、その作品との比較を通してはじめて作者

の意図するところ、またその主題が浮かび上がってくる。言い換えるなら、「等待」は葉石濤と日本文学の関係を考える上で貴重な作品であり、また作者の文学的再出発の心構えをうかがい知る上でも、重要な位置を占めるものと考えられるのである。

第1節 「等待」と「満願」—その共通点—

葉石濤の短編小説「等待」は1967年9月、『青溪』に中国語で発表された作品である。

葉石濤の処女作は日本植民地時代の1943年4月、『文藝台湾』に掲載された日本語小説「林からの手紙」であり、同年7月、同誌に「春怨」というやはり日本語の小説を発表している。戦前に発表された作品はこの2篇だけだが、葉石濤はまぎれもなく日本語作家として、作家生活をスタートさせたことになる。ところが、間もなく日本は敗戦を迎え、戦後大陸から台湾へ渡ってきた国民党政府が日本語を禁じたために中国語への言語転換を余儀なくされたこと、また「検肅匪諜条例」の第九条「知匪不報」(匪徒と知りながら密告しない)によって逮捕され、五年の徒刑を宣告されたこと(後減刑され、三年で出獄)などによって、文学的にも生活的にも極めて困難な状況に陥る。実際、1951年以降、葉石濤は一旦筆を折り、1965年に中国語による中編小説「青春」を『文壇』に発表して「文壇復帰」を果たすまで、長い空白時期が続くことになる。

「等待」は所謂「文壇復帰」の翌々年に発表されたことになるが、この作品は明らかにある日本文学作品の影響を受けている。太宰治の「満願」がそれである。

「満願」とは、1938年9月『文筆』に発表された作品である。太宰治は、1936年10月、パビナル中毒治療のため東京武蔵野病院に入院し、退院後の翌年3月、その入院中に「姦通事件」を起こした妻・小山初代と心中しようとしたものの未遂に終わり、初代との正式離婚などを経て、所謂「排除と反抗の時代」¹³の「前期」に幕を引く。それから約一年の沈黙の後、「安定と開花」¹⁴と評される「中期」が始まるのだが、「満願」はその中期の第一作として位置づけられている作品である。つまり、「遺書」として小説を書き始めた太宰が、自殺ではなく生きることを選択し、自らの再生への思いを込めて書いたのが、この作品だったのである。

「満願」の梗概を述べると、以下ようになる。伊豆の三島で一夏を過ごしていた「私」がある町医者と親しくなり、毎朝新聞をよむためにその家に行く。そこで、「簡単服に下駄をはき、清潔な感じの」若い女性を見る。彼女は小学校教師の妻で、夫の肺の病気のために三年間も夫婦の営みを禁じられている。八月の終わり、彼女が「さつさつと飛ぶやうにして」医者のところから帰っていく。やっと医者からお許しがでたのである。その姿に「私」は「美しいもの」を見たと思う。

葉石濤の「等待」は、太宰の「満願」と基本的な枠組みは全く同じである。「満願」と同じく、小説家の「我(私)」は、長年の不摂生がたたって体の調子がおかしくなり、村の「張醫生(張医師)」のところへ行く。そこで、「江美麗」という若い女性を見る。彼女の夫は肺結核で三年間寝たきりになっていて、夫婦の営みを禁じられている。ある日、医師からついにお許しを得た彼女は「就連蹦帶跳的(飛び跳ねるように)」帰っていく。それを見て、「我彷彿成功地了悟了人生頗奧妙的哲

理似的(私は何か人生の奥妙な哲理を感得することができたように思う)」。

主にストーリー的な部分から、両作品の共通点を整理すると以下ようになる。

- ① 小説家である「私」の眼を通して、物語が叙述される。
- ② 「私」は医者のところでは一人の若い女性を見る。
- ③ 若い女性の夫は肺の病に侵されており、その病気のために妻との性行為を禁じられている。
- ④ 医者からついに許可を得た若い女性は、急いで医者のところから帰っていく。その姿に「私」は胸を打たれる。

つまり、「満願」と「等待」とは基本的設定がほとんど完全に一致しているのである。若い女性の夫がどちらも肺の病であるだけでなく、その病に罹ったのが「三年前」という点も、若い女性が「パラソル」¹⁵を持っているという部分まで同じである。そもそも「等待」(待つ)というタイトルにしてからが、太宰治が戦時下に書いた短編「待つ」¹⁶を連想させるものである。太宰の「待つ」に関しては、鶴谷憲三が「張りつめた、ひたむきなものが感じられる掌篇である。中期の初頭の「満願」と同じ位相にあると考えられる」¹⁷と述べているように、かねてよりその関連性が指摘されているものであり、葉石濤がわざわざこのタイトルで小説を書いたことに関しても、全くの偶然であるとは考えにくい。

このように見えてくると、葉石濤ははっきりと太宰治の作品を念頭において、「等待」を書いた可能性が高いが、では「等待」と「満願」は全く同趣旨の作品なのかというと、必ずしもそうとは言えないようである。以下、両者の相異点を挙げてみたいと思う。

第2節 「等待」と「満願」—その相異点—

前節において、「等待」と「満願」における、主にストーリー上の共通点を挙げ、「等待」が「満願」の強い影響を受けて書かれた可能性が高いことを述べたが、本節においては逆に、両作品はどこが異なっているのか、その相異点について見ていきたいと思う。

まず指摘したいのは、原稿枚数の違いである。「満願」は400字詰め原稿用紙に換算して4枚程度の掌篇に過ぎない。一方の「等待」は原文が中国語であるため単純な比較はできないのだが、筆者がかつてこの作品を日本語に訳してみた¹⁸ところ、400字詰め原稿用紙に換算して約30枚となり、少なくとも原稿枚数の上では短編小説としての骨格を有する作品になっていた。つまり、葉石濤は「等待」を書くにあたり、ごく単純に計算して太宰の7倍以上の量を書き込んでいることになる。実際、両作品を読み比べてみると、それぞれから受ける印象はかなり異なっているのである。

では、一体どのような相違点があるのだろうか。ポイントとなる項目を挙げ、以下それらについて具体的に述べていくことにしたい。

- ① 人物の描き方
- ② 生臭さの有無

①についてだが、「満願」は掌篇であることもあってか、登場人物は全て、スケッチ風にごくあっさり描かれている。先ず町医者に関しては名前もなく、外面描写は「三十二歳の、大きくふとり、西郷隆盛に似てゐた」というだけで、その内面にしても、

お醫者の世界観は、原始二元論ともいふべきもので、世の中の有様をすべて善玉悪玉の合戦と見て、なかなか齒切れがよかつた。私は愛という單一神を信じたく内心つとめてみたのであるが、それでもお醫者の善玉悪玉の説を聞くと、うつつうしい胸のうちが、一味爽涼を覚えるのだ。¹⁹

というように、複雑に苦悩する「私」の対極にある、非常に単純な存在として描かれている。一方の「等待」では、冒頭「我不太喜歡張醫生(私は張醫師があまり好きではない)」という一行に始まり、「張醫生」に関する描写にかなりの分量を割いている。

看到我，一縷驚奇之情掠過張醫生幽雅乾淨的長臉，他趕忙放下正在拔鼻毛的小鉗子，扯高了嗓子，喚醒正在打瞌睡的藥局生，叫他端茶來。(私を見ると、驚きと好奇の入り混じったような表情が、張醫師の優雅で小ぎれいな細面をかすめた。張醫師は鼻毛を引き抜いていた小型のピンセットを慌てて下に置き、声を張り上げて、居眠りをしていた助手の薬剤師を起し、茶を持ってくるよう命じた。)²⁰

これは、「我」が「張醫生」を訪ねた場面だが、以下身体の不調を訴える「我」と、小説の事など考えずに畑仕事をするようにと勧める「張醫生」の間にユーモラスな会話が続き、いかにも村の診察所らしいのんびりとした雰囲気と、頑固ながら憎めない「張醫生」の人となり生き活きと描かれる。しかも、その記述は本人にとどまらず、その父親にまで及ぶのである。

他的父親在日據時代是一個醫道頗精的走街仔先(漢醫)，(中略)他不耐煩日本人取締漢醫，常常找他的麻煩，因此，一清早便蹲在茅坑裡，扯高嗓子亂唱日本國歌，以資洩恨。由於他不懂日文，曲調還算不差，至於用台灣話亂編的歌詞涉及到性器名稱，於是惹了禍，被罰「不敬」罪，坐牢二十九天，而且被拷打得死去活來，差一點便翹辮子了。(張醫師の父上は日本統治時代の、医術に精通した漢方医で、(中略)彼は日本人が漢方医を取り締まり、常々彼の邪魔をするのが我慢ならないので、早朝便所にかがんで、声を張り上げて日本国歌をムチャクチャに歌っては恨みを晴らしていた。彼は日本語がわからないので、曲調はまあ合っているのだが、台湾語で適当に作った歌詞で、挙句の果てには性器の名前まででてくる始末、それが災いの元となって、「不敬」罪とみなされ、牢屋に入る事二十九日、しかも死ぬほどの拷問を受け、もう少しで

おだぶつになるところだった。) ²¹

このように、「張醫生」の父親の日本植民地時代における反骨ぶりが描かれるが、重要なのは「張醫生」が二代続いてこの土地に根を下ろしている村医者であり、「我」もまたそうした事情を知っているという点である。「我」が「張醫生」の家について知っているように、「張醫生」も「我」のことを、その家庭事情にいたるまで心得ている。長年の不摂生がたたって体調を崩した「我」に、「張醫生」は治療法として畑の草取りを命じるが、そのようなことが可能であるのも、父祖伝来の畑を荒れ放題にさせている「我」の状況について、「張醫生」がよく承知しているからこそである。つまり、互いに相手の家族から家庭状況まで熟知している、台湾の農村という一種の共同体が小説の舞台として設定され、「我」も「張醫生」も、等しく共同体の一員としての役割を与えられているのである。

続いて作品の主題と関わる若い女性についてだが、「満願」では、ただ「若い女のひと」とだけ書かれているのに対し、「等待」においては「江美麗」という名を持つもの、つまり「張醫生」や「我」と同じく、共同体の一員として描かれている。また「満願」では、「簡單服に下駄をはき、清潔な感じのひと」とあるだけで、それ以上の具体的な描写はないのだが、「等待」の「江美麗」に関しては、

那女人大約二十多歲，一身村婦打扮，好似剛剛摔下田裡的活，急忙趕過來似的。那女人說不出來的美打動了我的心；臉色白皙得很，豐滿的臉頰因趕路的關係吧，染成一層桃紅色。汗毛密生的脖子有晶瑩的汗珠。一雙眼睛又大又烏黑發亮，閃露著焦燥的神色。我從沒看見過這樣洋溢著青春光采的女人。她的美是心身皆健康的女人特有的那一種。（その女性はだいたい二十歳を少し出たぐらい、村の女の服装で、いかにもさっきまで畑にいたのが、急いでここまで来たという感じだった。その女のなんとも言われぬ美しさは私の心を動かした。顔は透き通るように白く、ふっくらした頬は道を急いだせいであろう、桃色に染まっていた。産毛の濃い首すじには汗の雫がきらきらと光っていた。ぱっちりとして、艶やかに黒い眼には、焦燥の色が浮かんでいた。私はこのように青春の光輝に満ち溢れた女性を見たことがなかった。彼女の美しさは心身ともに健康な女性だけが持っているものであった。）²²

と微細に描き出されている。

しかも、注目すべきは、「満願」の中で「私」は「若い女のひと」を見るだけであるが、「等待」において、「我」は時に語り手から一人の登場人物へと変身し、「江美麗」と親しく言葉を交わしもするのである。

她向我迅速的瞥了一眼，不知爲什麼，竟羞怯地低下頭來；我看見她的額上滲出一粒粒汗珠。

「到張醫生那裡去嗎？」我再驚奇於她憾人心弦的艷麗寒暄了。

「嗯……」她避免作答，繼而嫣然一笑，用又細又清脆的聲音搭腔了……「你病好了，可以做活

兒啦！」

「本來就沒有什麼病嘛！我這是懶病呢！」我苦笑了。她不懂我話裡的自嘲和氣餒一本正經地勸我：「石頭哥，少做點兒！」就忙著趕路去了。

(彼女は私をちらっと見ると、なぜかは知らないが、恥ずかしさに耐えられないように頭を下げた。私は彼女の額に汗の粒が滲み出ているのを見た。

「張先生のところへいらっしゃるのですか」私は、人の心の琴線をふるわせずにはおかない彼女の艶かしい挨拶にまた驚いた。

「はい……」彼女は答えを避け、そしてにっこり微笑むと、細い、澄んだ声で口を開いた……

「御病気は良くなったんですね、畑仕事ができるなんて！」

「元々病気なんかじゃないんですよ！ 私のこれは怠け病なんです！」私は苦笑した。彼女は私の言葉のうちにある自嘲や弱気はわからないらしく、しごく真面目な調子で、「石兄さん、ほどほどになさいましょ！」と言うと、あわただしく立ち去ってしまった。) ²³

これは畑で草取りをしている「我」が、医者のところへ行こうとしている「江美麗」に会う場面であるが、「江美麗」は「我」に向って、「石頭哥，少做點兒！（石兄さん、ほどほどになさいましょ!）」という。つまり、彼女にとって、「我」は小説家などというある種特別な存在ではなく、当然畑仕事に精を出して然るべき、彼女と同じ村人の一人として認識されているのである。

「語り手」が「作中人物」をも兼ねるという作品は日本文学にも少なからず存在するが、その「語り手」が小説家である場合には、例えば山本周五郎の『青べか物語』において「語り手」の「私」が、町の住人から「蒸気河岸の先生」と呼ばれていたように、一種特別な存在（あるいは共同体に属さない余所者）として描かれることが多い。

ところが、「等待」における「我」は、他の登場人物から全く特別視されない。「張醫生」も、「江美麗」も、「我」を単なる村人の一人（あるいは同じ共同体の一員）として見、自由に苦言を呈したり、親しげに言葉を交わしたりするのである。「語り手」という作中において特別な位置を占める存在でありながら、「我」はその特別性を他の作中人物の前ではあえて消し去り、「村」という共同体の中に自らを溶け込ませている。「我」が「江美麗」に対する関心を隠そうとせず、あげく妻との間に言い争いが生じる以下の場面などは、「我」が物語の語り手であると同時に、同じ共同体の一員として、他の登場人物と同じ場所に立っていることをよく示していると言えるだろう。

「你可知道烏秋村有一個叫江美麗的媳婦？」

「嘻嘻……你看上了她！」我的老婆抿著嘴頰不以爲然地瞄了我一眼。

「笑話！別胡扯！活了這麼一大把年紀還會吃醋！」我氣得吼了一聲。

（「お前、烏秋村に江美麗という嫁さんがいるのを知っているか」

「あら……あんた、あの娘をみそめたの！」妻は口をすぼめ、心外そうに私を見た。

「くだらん！ ばかばかしい！ そんな年になってもまだヤキモチか！」私は怒って怒鳴りつ

けた。) ²⁴

また、別の場面では、「我」は江美麗に対する感情を臆面もなく露にしている。

我憶起江美麗娟秀的臉龐，心裡猛地起一種憐惜之感；如果她現時在我面前，我會不顧一切地摟住她、撫摸她柔軟的髮絲，給她慰藉，哪怕天塌下來我也照做無誤！（わたしは江美麗のすっきり整った顔を思い出し、心に激しく憐憫の情が湧いてくるのを感じた。もし彼女が今この場に現れたら、私はなりふりかまわず抱きしめ、彼女の柔らかな髪をやさしく撫でて慰めてやるだろう。空が落ちてきたってかまいはしない。) ²⁵

「等待」におけるこれらの記述は、「満願」の「私」が純粹にカメラ・アイに徹し、「若い女のひと」とは決して個人的に交わらない点と好対照をなしている。「等待」の「我」は物語の視点としての位置だけにとどまらず、他の人物たちの中に入り込んでいき、ごく自然に彼らの隣人としてふるまう。「我」は「語り手」でありながら、決して外から来た余所者ではなく、単なるカメラ・アイでもない。他の人物たちと同じく、一つの土地に根を下ろした存在なのであり、共同体の一員なのである。

以上をまとめると、太宰治は「満願」において、伊豆の三島を訪れた時の見聞として、つまり通り過ぎる人間としての視点から、スケッチ風に作中人物を描いているのに対し、葉石濤は「等待」の舞台を、台湾の農村という一つの共同体に設定し、語り手の「我」をもまた、その共同体の一員として他の登場人物と同じ場所に置くことにより、内側から人物を、そして物語を叙述していると考えられるのである。

次に②であるが、「満願」と「等待」という二つの作品の違いを決定づけるものとして、筆者は「生臭さ」の有無を挙げたいと思う。夫婦の性行為を、「生臭さ」というマイナス・イメージ的な、且つ感覚的な語で表すことについては批判もあるかと思うが、筆者はあえてこの語を用いたい。それは、ここで取り上げられている性行為が、性的欲求の「三年間」に渡る抑圧という特殊状況を背景にしているのであって、単なる性行為そのものに付随する「生々しさ」とは質を異にするからである。

病の床にあってなお夫は性的欲望に捉われ、しかもそれが禁じられることによって、妻との間に緊張関係が生じる。妻はその緊張に耐えられず、度々医師のもとを訪れる。少々大袈裟な表現を用いるなら、この状況は人間存在に関わる一種の暗さを示していると言えるはずだが、太宰の「満願」は逆にその暗黒面を徹底的に排除したところに成立している。小説というより散文的なさりげない文体も、掌篇的な短さも、カメラ・アイとしての「語り手」の設定も、一筆書きのようにさりげない人物描写も、また若い女性の夫の職業が「小學校の先生」、つまり教育者である点も、全てはその背後に横たわる暗さと、その底から立ちのぼってくる一種の臭気を読者に感じさせないための方法、あるいは装置であると考えられる。そのため、読者は「生臭さ」の一步手前で立ち止まり、

八月のをはり、私は美しいものを見た。朝、お醫者の家の縁側で新聞を讀んでみると、私の傍らに横坐りに坐つてみた奥さんが、「ああ、うれしさうね。」と小聲でそつと囁いた。ふと顔をあげると、すぐ眼のまへの小道を、簡單服を着た清潔な姿が、さつさつと飛ぶやうにして歩いていった。白いパラソルをくるくるつとまはした。²⁶

という女性の姿を、「私」と同じように純粹に「美しい」と感じる事ができるのである。「満願」の世界はそのように創られている。

ところが、一方「等待」では、太宰治が排除した「生臭さ」が寧ろはっきりと出ている。一例を挙げると、「我」が自分の妻から「江美麗」の嫁ぎ先における状況について聞かされる以下のような場面がある。

就是嫁給那王濱太不值得了。王濱虛有其表、外強內乾，聽說她一跨進阿濱家的門檻，阿濱就得了不治之症，一躺就是三年。她的公婆說，她有「破家」之相，很不高興她。真是紅顏薄命，一點也不錯。可是阿美卻也不氣餒，上侍公婆下奉丈夫；下田、餵豬樣樣得來，而且臉上不離笑容，整天沒一句怨言，真是好乖巧的媳婦！（王濱なんかのところへ嫁に行ったのがもったいないって言うんですよ。王濱は見かけ倒しで、外見は強そうだけど、中身はからっきし、なんでもあの娘（江美麗）が濱さんの家の敷居を跨いだとたん、濱さん是不治の病にかかっちゃまって、そのまま三年も寝たきりなんですって。あの娘の舅姑が、あの娘には「家を滅ぼす」相があるとか言って、ひどく嫌っているのよ。まったく美人薄命って、嘘じゃないわね。それでも美麗さんは氣丈でね。舅姑や夫にまめまめしく仕えて、畑仕事や豚の世話まで何でもこなす。しかも顔には笑顔を絶やさず、一日中一言も愚痴をこぼさない。本当によくできた御嫁さんですよ！²⁷

嫁を虐げる舅姑、役に立たない夫、辛い仕事。それでも妻は「笑容（笑顔）」でその一切を受け入れなければならないという、前近代的ともいえるべき台湾農村の悲劇がここでは暗示されている。しかも、「満願」においては、「小學校の先生」という教育者のイメージから巧みに隠蔽されていた夫の性欲についても、「張醫生」の口からはっきりと語られる。

她的丈夫阿濱患的是肺癆，病得可不輕。你知道患肺癆的人性慾特強，是吧！（彼女の夫濱さんは肺結核だったのですよ、それも軽くはないやつにね。あなたは肺結核の患者は性欲が特に強くなるのを御存知でしょう？）²⁸

夫の性欲を「特に強い」ものとして描いたことで、「等待」は「満願」とは受ける印象が決定的に異なる作品になったと言えるのではないだろうか。辛い労働と舅姑の酷い仕打ちに耐える若い妻が、やっと夫と二人きりになった時、今度は夫の強い性的欲求の前に晒されなければならない、しかもその求めに応じることは許されないという悲惨な状況が暗示され、「満願」で「美しいもの」として捉えられた夫婦の性が、ここでは、その陰惨な面を剥き出しにするのである。

このように「等待」には、台湾の農村の、「生臭さ」を伴った暗さが濃厚に示されているのであるが、それは語り手の「我」を共同体の一員として設定した時点で、当然起こり得る結果だったのかもしれない。そして、これこそが人物の中に踏み込まず、「生臭さ」を排除して、ただ「三年間耐えて待ち続けた」という行為そのものを抽出し、一幅の「美しい」絵として描いてみせた「満願」とは大きく異なる点であろう。もし、この点が葉石濤の意識的操作によるものだとしたら、一体どのような意図に基くのだろうか。その問題を、次に考えてみたい。

第3節 「等待」に込められた光への希求

葉石濤は「等待」を書くにあたり、物語を内側から叙述するという方法を採用している。「我」は「語り手」であると同時に、「共同体の一員」なのである。そうした方法により、太宰の「満願」では巧みに排除されたところの「生臭さ」が、前近代的とも言うべき台湾の農村を舞台に逆に濃厚に示され、結果的に両作品がかなり印象の異なるものになっていることについては前節で述べた通りである。

本節では、葉石濤が「等待」の中で、あえて太宰とは逆に「生臭さ」を描き出している点が、作者のどのような意図に基くのかについて考えていきたいと思う。

冒頭でも述べた通り、葉石濤は戦後の国民党政権下において、1951年に逮捕され五年の徒刑を宣告された。後に減刑され、1954年に出獄したものの、以後の生活は悲慘を極めた。前述のごとく、葉石濤が文壇に復帰するのは1965年に『文壇』に発表した中篇小説「青春」によってであるが、この作品が後に一冊の作品集として出版された時、序文の中で作者は当時を回想して以下のように書いている。

戦後我並沒有停止寫作，我用日文和中文寫下不少的作品。這些作品都已埋葬在歷史的墳墓裏。從一九四五年到一九五一年，我經過了二二八及白色恐怖，惶惶度日，但仍忠實地以作品反映了這時代、社會的動向。可惜一九五一年我銀鑰入獄，直到一九五四年才獲得釋放。被釋放以後，我在台灣各地流浪做小學教師謀生。不幸，結了婚又生下了孩子。生活的艱辛使我終日鬱鬱寡歡，眉頭深結，常常因沒有孩子的奶粉錢而自責。這時候，給我帶來少許安慰的是捧著日文譯詩集在稻草堆裏朗讀。(中略)一首接著一首的唸，不知何故，竟淚流滿面，在嗚咽聲中結束。(戦後私は創作を停止したのではなかった。私は日本語と中国語によって少なからぬ作品を書いている。これらの作品は全て歴史の墓場に埋もれてしまった。1945年から1951年まで、私は二二八事件と白色テロによる恐怖の日々を生きたが、作品はこの時代及び社会の動向を忠実に反映している。残念なことに1951年投獄され、1954年になってやっと釈放された。釈放後、私は台湾各地をさすらい、小学教師として暮らしを立てた。不幸にも結婚をし、子供まで産まれた。生活の辛さで私は終日鬱々として楽しまず、眉根に深い皺を寄せ、しばしば子供のミルクを買う金がないことで自分を責めた。こんな時、わずかに私の心を慰めてくれたのは日本語の訳詩集を、積み上げられた藁の中で朗読することであった。(中略) 一篇、また一篇と声に出して読

んでいると、故知らず涙が顔中を濡らし、あとはただ嗚咽に終わるのだった。)29

また、2002年に葉石濤が来日し、東京大学で行った「私の台湾文学六〇年」という講演の中でも、同様の回想をしている。

よく思い出すのは、私が田舎で小学校教師をやった時、お金もなければ着物もないという酷い境遇に陥ったんです。仕方がないからアルチュール・ランボアの『酔いどれ船』という詩集を持って、木の下でそれを読みながら一人で泣きましたよ。四〇歳になって一文もなし。子供のミルクの金さえない。³⁰

金銭的な困窮もさることながら、一人で詩集を読むことによってだけ、わずかに心をなぐさめられるという精神的孤独が、長い間葉石濤を苛み続けたのである。しかも、その詩集が日本語訳であったというところに、葉石濤が耐えなければならなかった孤独の深さを感じる。

今でこそ、台湾には親日的というイメージがあり、日本語教育熱も盛んであるが、戦争終了直後から長い期間に渡って、日本語及び日本に関わるものが厳しく排斥されたという事実がある。戦後の台湾の大学に日本語学科が初めて設立されたのは、戦後20年近くを経た1963年、中国文化学院（現在の中国文化大学）東方語文学系日文組においてであった。蔡茂豊は『台湾における日本語教育の史的研究』の中で次のように述べている。

日本語学科なら正式に日文系とか、日本語文学系とか称すればいいのを、なぜか東方語文学系と名付けたところに疑問が起こるのである。それは間違いなく日本語云々を嫌って、東方語にしたのだとしか解釈できない。(中略) 何故なら、当時どの大学でも日本語学科設置について、政府当局に向かって日本語の「日」さえ口に出すことのできない雰囲気があったからである。³¹

中国文化学院に続き、1966年に淡江文理学院（現在の淡江大学）東方語文学系、1969年に輔仁大学東方語文学系、1972年に東呉大学外文系東方語文組と三年おきのペースで、日本語学科が設置された³²。しかし、1972年、日本政府は大陸の中華人民共和国との「国交正常化」に伴い、台湾との国交を断絶したために、台湾国内において再び反日の気運が高まり、日本語学科の増設も停止された。しかも日本語学科が設置された上記4校は全て私立学校である点も見落とすことはできない。国立大学重視の台湾において、はじめて国立大学に「日本語文学系」が設置されたのは台湾大学においてであるが、それは1994年のことである。現在でも、「日本語文学系」の博士課程は私立東呉大学一校にしか設置されていない。これらの事実は国民党政権下の台湾において、日本語が長きに渡って排斥され続けた歴史をよく表していると言えよう。

上述のように日本語が厳しく排斥されていた時代に、葉石濤は一人涙を流しながら日本語の詩集を読むことでしか心の慰めを得ることができなかったと言っているのである。そのやるせない思いが「等待」の次のようなくだりに、客観化され虚構化され、軽いユーモアを湛えながら、し

かし抑えようのない激しさを内に秘めて吐露されているように見える。

村人看我喝不起一瓶五元五角瓶裝的太白酒，就個個有莫名的優越感，而且我寫小說不耕田一事更惱怒了他們，他們便肆意的謾罵我沒出息，把我視之如異端禽獸了。(村人は私が瓶詰めの5元5角の太白酒を飲めないことに、何やら奇妙な優越感をおぼえるらしく、また私が小説を書いて畑仕事をしないのが気にさわるものだから、私のことをろくでなしのなんのと言いたい放題罵り、まるで異端のケダモノのように見下しているのだ。)³³

それでは、「等待」の「我」が、医者 of 許しを得て急いで帰っていく「江美麗」の姿を見て、「彷彿成功地了悟了人生頗奧妙的哲理似的(何か人生の奥妙な哲理を感得することができたように思う)」のはなぜだろうか。

前節で述べたように、「江美麗」は悲惨な状況に置かれている。そんな彼女の状況が、医者にとの性行為を許されたというだけで、一体どれほど改善されるのだろうか。「満願」においては医者 of 許可を得ればそれでよかった。しかし、「江美麗」を取り巻く状況はそれほど単純ではない。嫁に「破家之相(家を滅ぼす相)」があると信じている舅姑は相変わらず彼女を虐げ続けるであろうし、夫の身体が快方に向ったとはいえ、依然として辛い仕事の数々がこの若い妻を待っているに違いない。医師 of 許可は、決して安易に救いと呼べるようなものではないはずなのである。

しかし、そうであるにも関わらず、「江美麗」は全身で喜びを表現する。何故であろうか。そこに封建的な村の世界しか知らない女の愚かさや浅はかさを見るのは容易い。悲惨な状況にありながら、自らはそれに気付かない女の悲劇を見ることは容易い。しかし、「我」はそのどちらでもなく、ただひたすらその姿に胸を打たれるのである。

「我」 of 感動はどこからくるのだろうか。医師 of 許可が何をえ得るかという点に重点があるのではあるまい。寧ろ実際にはさして状況を変え得るわけでもない医師 of 許可に、それほどまでに喜ぶことができる「江美麗」 of 、苦しい生活の中でも決して麻痺してはいない心の瑞々しさにこそ、「我」を感動させるものがあると見るべきだろう。

「真的！這是真的嗎？」她差一點就拍手喊叫起來，那欣喜雀躍、神采奕奕的神情，也傳給我說不出的高興。(中略)她一心一意想回家去；但還是忍住了。

「不必了，你趕快回去吧！」張醫生看出她的窘態，搖了搖頭，又心滿意足的嘔了嘔嘴(中略)

「那我走了……」江美麗不再遲疑未決，好似聽到下課鈴聲爭先恐後往教室外奔跑的小女孩，甚至忘記陽傘，轉身就連蹦帶跳的往外跑。

(「本当！ 本当でございますか？」彼女はもう少しで手を打ち鳴らさんばかりで、その喜びに満ちあふれた、うきうきとした表情は、私にも言い知れぬ嬉しさを伝えた。(中略)彼女はすぐに飛んで帰りたい様子だったが、それでも我慢している。

「いいんですよ、はやくお帰りなさい！」張医師は彼女がきまり悪そうなのを見て取って、手を振り、そして満足そうに微笑んだ。(中略)

「それではごめんください……」江美麗はもう迷わなかった。まるで下校のチャイムを聞いて、われ先に教室を飛び出す女の子みたいに、日傘を持つのも忘れて、飛び跳ねるように外へ駆け出した。) ³⁴

どんな悲惨な状況にあっても絶望せず、辛抱強く待ち続ける。それでも救いはついに訪れないかもしれないが、いつか物事は少しは良い方へ動き出すかもしれない。少なくとも微かな光のような予感はある。「我」が感得したのはそのような「哲理」であり、走り去っていく「江美麗」の姿には、「我」の、いや葉石濤自身の、その予感を信じようとする祈りにも似た思いが込められていると筆者には感じられるのである。

葉石濤は太宰治のように「生臭さ」を排除した「美しいもの」としては「等待」を書くことができなかった。農村の小学校教師としてなんとか暮らしを立てていた当時の葉石濤は、そうした農村が蔵している、「生臭さ」を伴った暗さの中に一度深く沈みこみ、その底から新しい光を希求したのに違いない。だからこそ、その光を垣間見せる存在は都会の洗練された女性ではあり得ず、同じ台湾の農村の土の中から、瑞々しい香気を放って立ち現れてくる女性、すなわち「江美麗」でなければならなかったのである。

まとめ

本稿は、葉石濤の「等待」と太宰治の「満願」を比較し、その共通点と相違点を分析するとともに、葉石濤が作品にどのような思いを込めようとしたのかについて考えてきた。

葉石濤は「満願」から基本的設定をほぼそのまま借りながら、台湾の農村に生きる女性の悲惨な状況と、長い間自らが嘗めなければならなかった無念さを盛り込み、その中から微かな光を摸索するという形で、自分の作品として昇華してみせた。精神病院への入院や自殺未遂を経た太宰が再生への思いを込めて「満願」を書いた姿に重ね合わせるように、葉石濤は自分自身の再生への祈りとして「等待」を書いたのだとも言えるだろう。しかも、太宰治が39歳で自ら命を絶ったのに対し、葉石濤は粘り強く生き続け、孜々として書き続ける道を選んだ。そうした執念のようなものが、「等待」の構成の上にも現れているようである。

「満願」が随筆風の、さらりと書き流すような体裁になっているのに反し、「等待」の構成はかなり凝ったものになっている。「我不太喜歡張醫生(私は張医師をあまり好きではない)」という一行で始まった作品は、次のように締めくくられるのだ。

那夜我結束了等待和徬徨的日子，提筆埋頭開始寫作，寫下了我的小說開頭第一段：「我不太喜歡張醫生……」(その夜、私は何かを待ち続け、彷徨する日々々に別れを告げた。筆をとって書き始めた。その小説のはじめの一行はこうである。「わたしは張医師があまり好きではない……」) ³⁵

このように作品は一巡りして、また冒頭の一行に戻る。書くこと、書き続けること。もし本当に救いがあるとしたら、こうした果てのない、営々とした行為の果てにはじめて訪れるのではないか。困難な時代を生き抜き、日本語から中国語へと言語を変えながらも作家であり続け、齢80にしていまだ現役作家である葉石濤の人生について考える時、この作品の持つ意味がより一層深みを増すように思われる。

注

- 1 葉石濤『台灣文學史綱』（高雄：文學界雜誌、1987年）。この作品は中島利郎らの訳により『台湾文学史』（研文出版、2000年）のタイトルで日本でも出版された。
- 2 楊照『夢與灰燼』（台北：聯合文學出版、1998年）106頁。
- 3 葉石濤「林からの手紙」『文藝台湾』第五卷第六号（1943年4月）。『文藝台湾』は西川満らによって1940年に創刊された文芸誌。葉石濤が処女作を発表した当時、台湾の文芸誌としては西川満主導の『文藝台湾』と張文環ら台湾人作家を中心とする『台湾文學』の2誌があった。この処女作掲載が縁で、葉石濤は西川満の知遇を得、『文藝台湾』の編集を手伝うようになる。
- 4 葉石濤「春怨」『文藝台湾』第六卷第三号（1943年7月）。副題に「我が師に」とある。作中におけるその「師」の名前が「西村」となっており、明らかに西川満を暗示している。当時の葉石濤の西川に対する傾倒ぶりが窺われる作品である。
- 5 葉石濤『紅鞋子』（台北：自立晚報出版、1989年）。葉は白色テロの時代を背景にしたこの作品により、「金鼎獎」を受賞している。
- 6 葉石濤『台灣男子簡阿洵』（台北：草根出版、1996年）。
- 7 葉石濤『西拉雅末裔潘銀花』（台北：草根出版、2000年）。葉は自ら台湾先住民族を主人公とした小説を書くばかりでなく、先住民作家を積極的に評価することでも知られる。2002年に東京大学で行った講演「私の台湾文学六〇年」の中でも、「台湾文学の未来は先住民作家の肩にかかっている」という旨の発言をしている。
- 8 葉石濤「玫瑰項圈」『小説創作』三十一期（1966年12月）。
- 9 葉石濤が当時の台湾人のための初等教育機関である公学校と、日本人との共学である中学校で日本語教育を受けた期間は1932年から1943年までである。
- 10 葉石濤『一個台灣老朽作家的五〇年代』（台北：前衛出版社、1991年）36頁。
- 11 葉石濤『賺食世家』（台北：圓神出版社、2001年）31-48頁。
- 12 彭瑞金「解説」葉石濤『賺食世家』（台北：圓神出版社、2001年）214頁。
- 13 奥野健男『太宰治』（文春文庫、1998年）81頁。
- 14 同上書、114頁。
- 15 「等待」における原語は「陽傘」。
- 16 新聞・雑誌未発表のまま、太宰治『女性』（博文館、1942年）に所収された作品。
- 17 鶴谷健三「待つ」『別冊國文學 太宰治必携』（學燈社、1980年）。
- 18 戸田一康訳「待つ」『第二屆文建會文學翻譯獎得獎作品集』（台北：中華民國行政院文化建設委員會、2003年）。
- 19 太宰治「満願」『太宰治全集第二卷』（筑摩書房、1975年）95頁。
- 20 葉石濤、前掲書、33頁。
- 21 同上書、35頁。
- 22 同上書、37頁。
- 23 同上書、41頁。
- 24 同上書、42-43頁。
- 25 同上書、43頁。

-
- 26 太宰治、前掲書、97 頁。
 - 27 葉石濤、前掲書、43 頁。
 - 28 同上書、48 頁。
 - 29 葉石濤『青春』(台北：桂冠圖書、2001 年) 3-4 頁。
 - 30 この講演は『新潮』第九十九卷第九号(2002 年 9 月)に「私の台湾文学六〇年」というタイトルで掲載された。引用部は同誌(270 頁)による。
 - 31 蔡茂豊『台湾における日本語教育の史的研究(上・下)』(台北：大新書局、2003 年) 17-18 頁。
 - 32 同上書 17 頁の内容を参照した。
 - 33 葉石濤、前掲書、32 頁。
 - 34 同上書、47 頁。
 - 35 同上書、48 頁。